

第五〇弾

高木さんの思い出の町・西京区桂編

赤いすまいば
知りな
標の町

ごとん、ごとん、と走る阪急電車。
黒く、タールを塗った
線路沿いの枕木の柵がつづく。
石ころだらけの地面から
春になると
つきつきに顔をだす土筆の群れ。
それを摘んでまわる子どもたち。
ああ、
懐かしき昭和四〇年代…



桂小学校の校舎をめぐり、すいぶん
子かわり、まよひながら



阪急の線路沿いで、昔にはここでよく土筆をとった。

地方へ出かけて「京都から来た
した」というとき、よく見受け
る相手の反応につきのふたつが
ある。
ひとつは、かつて、自分が訪れ
た京都について、熱心に記憶をた
どりながら話題をつなげてゆくタ
イプ。
もうひとつは、「京都の何処に
お住まいですか?」とはじめに聞
いかけてくるタイプだ。
前者の場合、大抵は相手の方
が京都についてよくご存知であ
る。こちらが一度も行ったこと
ない寺社仏閣や名所についてつぎ
つぎと解説、それは熱心に同意を
求めてくる。こちらはただホウホ
ウとフクロウのように合の手を
入れるしかない。青森市街のトン
カツ屋や、鹿児島呑み屋で、み
たことのない京都の話を、何度聞
かされたことだろう。
話の冒頭で身を乗り出し「京
都の何処にお住まいですか?」と
聞いてくる場合。「桂です」と
答えるのだが、キョトンとして次
の言葉を失ってしまう人が多い。
へええ、桂、ですか…そんな声に
答える言葉もきままっている。「ほ
ら、桂離宮のあるところですよ」
相手は、あーあー、とか、んーん
し、とうなずくものの、それきり
質問もしてこない。
おそらく、桂離宮を見たことは
ないのだろう。だが、なぜか相手
は納得?してしまふ。ただ、一度
だけ加藤周一の著作へとハナシが
ひろがり、弁証法的唯物論の講
義をエンエン聞かされるハメにな
ったことがある。アンジツヒだの、
フェールジツヒだのといわれて、
せつかくの純米大吟醸酒(しかも
その酒は京都では入手できな
い!)の味がさっぱりわからなくな



った。
閑話休題…
今回の訪問先はその「桂」な
のである。案内してくださったの
は高木克美さん。たいへん美しい
女性だ。
桂にはたくさんの町がある。高
木さんの家はある閑静な住宅地
にあった。中学校時代、一〇〇
メートルを十二秒六で走りきり、
全国中学ランキング二位にかが
いた彼女。その後も近畿中学新
記録・第六十三回全日本選手権
四×四〇〇mリレーでの単独日
本新記録など、数々の記録を残
している。日本陸上のホープとし
て期待されながら、日本体育大学
へ進学。しかし、残念ながら故障
に悩まされ、マネージャーとして
活躍、卒業後は日本初の女性ス
ターターとして名を馳せた。京都
国体でも話題となったから、新聞
などで彼女の記事を読んだこと
のある人も多いだろう。
文教女子短期大学の陸上部で
しばらく後進の指導にあたった高
木さんだが、現在は京都芸術短
期大学で学生部長・和太鼓の専
任講師を勤めている。すいぶん畑
違い?な転身とも受けとめられる
が、いたって自然な成り行きだと
いう。そのあたりの話は、たいへ
ん興味深い。…むかしの思い出、
話を桂の町と、むかしの思い出、
にもとさなければならぬだろう。
桂はとらえどころのない地域で
ある。いちばんにぎやかなのは阪
急桂駅周辺、もしくは国道九号
線、千代原口交差点の付近であ
る。だが、由来があるわけではない。
このあたりは二十五年くらい
前はほとんど畑ばかりが広がっ
ていた。阪急桂駅周辺ものんびり
とした感じで、住宅地がものし



これはそのグラウンド。足首に羽が生えたように子どもたちが飛びまわっている。



小学校を抜けて公園へ。ここはまったく以前のまま。



これは、ビー玉。今はほとんど売れないそうだ。



近く菓子屋さんで、懐かしい駄菓子やおもちゃ糖がみつかった。



かに並んでいただけである。コンビニやファーストフード店など、もちろん影もかたちもない。

歴史的にみても京都のなかにあって桂という地名が登場することはあまりないようだ。木村敏人の水路として桂川が重要であったこと、七世紀に秦氏が松尾神社をまつたことを除けば、あとは桂離宮くらいしか思い浮かばないのも事実である。桂川といえば、ある外国語大学の学生が神父から桂川のほとりで洗礼をうけ、川の水を額に垂らされたというが、これはもちろん、ハナシがちがうというものだろう。

阪急沿線にそだった高木さんの子ども時代の思い出：それはなんととっても上筆まさかツチフデと読むヒトはいないでしようね。ツクシです。線路周辺には春にはわからないが、線路周辺には春になるとツクシが無数に生えた。鉄分と石ころの多い土壌がスギナの成育に適していたのだろうか。とりあえず夕餉のオヒタシにするくらいは量ならかんたんに摘めた。

その当時といえば、テレビでは『みなし』ハッチ」が全盛であったという。ブラウン管で「ママ、ママはどこにいるの？」と、みつばちのハッチが毎週目をウルウルさせたそれは、さながら、「昆虫版母をたずねて三千里」であった。このあとはいま「樫の木モック」も、高木さんは欠かさず見ていたそうだ。

それから、「学研の科学と学習」。学校の中で売っていた記憶はあまりなく、下校時に校門でよく買ったそうだ。正確にいうと、学研の科学と、学研の学習というふたつの付録付教育雑誌であ

ほら、
ラムネがあったでしょう？
あのみどりのような、
あおようなガラス瓶に入っていた
ガラスの玉。
あれがほしくて
しようがなかったのを覚えている。

る。これを学研のおにいさんとおねえさんがベアになって売りに来るのだ。ミノは雑誌についている付録で、これは異常なほど子どもたちの人気をあつめた。

この紙面では半ば「お約束」となっているビー玉やメンコ遊び。高木さんにも経験はある。彼女と近所の菓子屋さんを訪れると、なんとホコリまみれになってはいるが、まだ現役で販売中であった。メンコの絵柄をみると、一九八七年当時のキャラクターが印刷されている。菓子屋のおばさんによれば、それが最後に入荷したメンコなのだそうだ。

「もう、今はそんな買いに来る子どもはいないねえ。遊びかたもわからへんのとちがう？ こういう遊びは、年かざの子どもが、年少の子どもに教えていって、伝わっていくものでしょ。今は、そんな遊びを教えられる子どももいないから……」

高木さんが、ふと、
「ほら、ラムネがあったでしょう？ あのみどりのような、あおようなガラス瓶に入っていたガラスの玉、あれがほしくてしようがなかったのを覚えている」とつぶやいた。おなじことを云う「元・少年少女だった人々」は多い。ピンを割ってしまったカンタンなのだが、どういわけかピンを割ったという話は聞いたことがない。

今の子どもたちなら、どうするのだろう。ピンを割って手に入れるのだろうか。それとも……

文／三村 溪
写真／大田 メグミ

赤いジャケットの
女子高生が
走り出す
標榜の町



通学路をめぐる高木さん。



ふたたび桂小学校の正門にて。今日はおつかれさまでした。



【プロフィール】
高木 克美

京都市出身。桂小学校を卒業後、家致学園中学校～高等学校を経て日本体育大学卒業。中学女子一〇〇mで国内第二位の成績をおさめて以来、スプリンターとして活躍。故障して後、女子では日本初のスターターとして京都国体なども話題になった。京都文教女子短期大学・陸上部で後進の指導・育成に動いた後、現在は、京都芸術短期大学で学生部長・和太鼓の専任講師。今後の活動に期待を集めている。